スポーツ文化の風を発信する

NITTAIDAI

08

ニッタイダイ　2004年　春

CONTENTS

二期長谷川体制がスタート

特集1■NITTAIDAIの明日を語る——1

「現状の課題と今後の方向性」への新役職者24名の“熱い想い”

特集2■リーダーズキャンプ——7

約160名のクラブ・サークルの代表者が集う白熱の討議

INTERVIEW●アスリートたち——9

Active People●社会の第一線で活躍するOB・OG——11

大学院の紹介●3学系の最新ニュース&リポート——13

NEWS●03下半期ニュース——15

News Eye●キャンパス内全面禁煙について——17

クラブ情報●03年度下半期クラブの主な大会成績——18

INFORMATION●dot.NITTAIDAI——19

NITTAIDAIの明日を語る

特集1

～現状の課題と今後の方向性～

国から競争的環境が政策として強く打ち出されて以降、多くの大学が社会の要請に応えるべく大学改革を押し進めている。そして、少子高齢化の中で本学が果たさなければならない役割に対する社会の要請も、日増しに増大している。そうした本学の変革が急がれる中、長谷川学長のもと大学・短大の新役職者が決定され、二期目がこの4月にスタートする。

今回の特集では、学長、副学長、大学院研究科長、体育学部長、体育専攻科長、学部各学科長、教養・教職科長、短大部長、短大各科長、教務・学生・就職の各部長、健志台教学局長・学長室長、図書館・体育研究所・スポーツトレーニングセンター・スポーツ局・健康管理センター・寮監長の各附属施設長に対し、直接インタビューを試み、それぞれの役職が抱えている現状の課題と就任の抱負、そして改革にかける"熱い想い"を語っていただいた。"改革への想い"が、全学で共有されることを願って――。

オールNITTAIDAIのエネルギーを結集し、21世紀に果たすべき本学の役割を実現したい。

学長
長谷川正明（はせがわまさあき）

我が国の高等教育は現在、戦後の新制大学発足期以来の大きな変革期にあります。大学のあり方を厳しく規制してきた大学設置基準が大幅に緩和・自由化され、教育課程や学部教育の編成が各大学の自由に委ねられるようになりました。また、国立大学の独立行政法人化や大学の「評価を重視した政策展開」の動きに見られるように、国公私立を問わずすべての大学が競争にさらされる時代に入りました。個々の大学の自由度が増すとともに、自己責任が要求される時代になったのです。

本学もそうした変革の時代の潮流から目をそらすわけにはいきません。体育・スポーツの専門教育機関として、また体育教員の養成大学として、日体大は110年に及ぶ長い歴史を重ね、社会的信頼を育んできました。しかし、少子化の進行の中で教員への道が狭まり、年々、学生の体育教員になる夢が難しくなってきています。最早、これまでの実績だけでは通用しない、厳しい環境に置かれていることを厳しく認識しなければなりません。

他方、スポーツや体育に対する社会のニーズは益々大きくなってきていることも事実です。スポーツはすべての人々に共通する関心事といっても過言ではなく、卓越したアスリートの出現はみんなの願いです。また、高齢化社会を迎え、健康を維持増進するためにアドバイス・指導ができる専門家が求められています。国の『スポーツ振興基本計画』では、老若男女が生涯を通じてスポーツに親しみ、楽しむ、生涯スポーツ社会の実現に向けて、全国各市町村に「総合型地域スポーツクラブ」を少なくとも一つつくることが盛り込まれ、そこでのスポーツ指導者が要望されています。従って、21世紀の日体大が果たさなければならない役割と貢献し得る場は果てしなく広がっている、といえます。

しかし、学生諸君が本学において4年間スポーツの道を追及し、スポーツや健康を専門として勉強していけば、それを活かした仕事に就ける、という就職環境にはありません。それが本学が今直面している最大の課題です。大学での部活や勉強で得たものがストレートに活かせるよう、その場所の確保や社会的環境作りに向けて今後、大学としていっそう努力しなければなりません。そうした厳しい状況下でも、学生諸君にお願いしたいのは、社会に出たとき、"スポーツの分野では負けないぞ"という自信とプライドを持ってもらいたいということです。勿論そのためには、努力の裏付けがなければならないのは当然です。日体大に入学したことの意味を考え、体育・スポーツの専門的な知識を勉強し、技術的にも実践的にも他の人とは違うぞというものを身につけるよう、充実した大学生活を送って欲しいと思います。本学は、そうした学生の努力と期待に応えられる環境を実現すべく教育内容、施設設備両面において改善に努める所存です。

"21世紀創造型大学"への課題は山積しています。学長としての2期目の3年間を、新執行部の方々の協力を得て、教職員・学生・同窓会のオール日体大のエネルギーを結集し、スポーツ・健康の専門大学としての本学の役割を十分果たし得る日体大を創るべく全力で取り組む覚悟です。

深沢キャンパスの再開発実現に向け、一翼を担いたい。

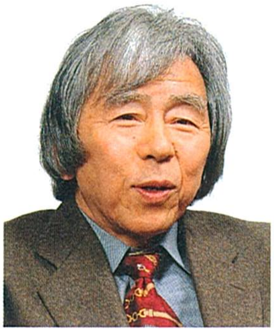
体育学部長
たきざわこうじ
滝沢康二

21世紀における日体大の新しいあり方を構築する上で課題は山積していますが、改革の方向性は明確化しつつあります。体育・スポーツ・健康づくりの分野でリーダー的存在であり続けること、そして競技力の向上、この2つの使命を実現することです。

そのためカリキュラムを一部変更すべく、その整備に入っています。学生の負担が大きい現行カリキュラムを、できるだけ各学科の特徴を出しながら必要な単位数を取れるようスリム化するとともに、ゼミを強化する方向です。既に健康学科と武道学科は、「社会福祉」と「伝統芸能」のコースを開設し、完成年度を迎えています。体育学科は、本学の使命である「トップアスリートの養成」と「教員養成」を目指す学科として改革の方向性を、社会体育学科は、生涯スポーツの時代にふさわしい指導者育成を目指す学科にしたいと考えています。

また、最大の懸案であった深沢キャンパスの総合再開発がようやく動き出そうとしています。先の2本の柱を社会的ミッションに、学長の提示した日体大の将来像を大事にしながら、キャンパス再開発の実現に向けて一翼を担いたいと思っています。

◆◆◆◆◆



“日体大は何をする大学なのか”という原点に立ち返って。

副学長
いとう　たかし
伊藤　孝

副学長としての私の使命の一つは、教学権を代表する大学と経営権を代表する理事会とが、大学の発展という目標で、協働の関係を更に推進していくための仕組みづくりや調整にあると考えています。当面の課題であるキャンパスの再開発問題については、学生の負担や保護者のみなさんの願いを真摯に受け止め、関係者の合意形成を図りながら、早期に教育環境の整備を実現していきます。

二つ目の使命は、本学がスポーツ科学を通した人間形成の場であるということを、大学構成員が再認識するプロセスを作っていくことだと考えています。それぞれの教員が一生懸命に日々の教育研究活動に従事しています。今、必要なのは、大学としてどういう人材を養成していくのかという大きな視点で、それぞれの活動を統合していくことではないでしょうか。

社会は目まぐるしく変化しています。本学に対する社会の要請も当然変わってきます。“日体大は何をする大学なのか”という原点に立ち返り、日体大の使命について、もう一度教職員のみなさんとともに考えていきたい、と思っています。

◆◆◆◆◆

専攻科一期生としての“想い”を具体的な形にしていきたい。

体育専攻科長
くすもとやすひさ
楠本恭久

専攻科は1971年（昭和46年）4月に開講されましたが、実は私は専攻科の一期生で、今回の就任には特別な感慨があります。愛着のある体育専攻科の発展のためにお役に立てればと考えています。

任期中は、もう一度体育専攻科の役割を明らかにしながら、どのようにすれば更に魅力あるものにしていけるのかについて、多くの先生方の話を聞きながら、方針を明確にし、急激な変更はあり得ないことを前提として、確実にできることから実現に向け努力したいと考えています。

体育専攻科を受験する目的は、大学院受験に際してもう一度スポーツ科学の知識や勉強の方法論を学ぶこと、あるいは、管理職を目指す教育現場の先生が1年間の課程で専修免許を取得するために入学するケースなど、多様であります。専修免許が取得できるメリットをもっと社会にアピールするべきですが、更に現場の先生方を受け入れていくためには、夜間の開講や、体育専攻科の役割を明確にしたカリキュラムの再編成などが課題になると思います。スタッフや運営コストの問題があり、将来的な検討課題になりますが、少しずつ合意形成を図っていきたいと考えています。

社会にも意義のあるメッセージを発信していきたい。

大学院体育科学研究科長
なかじまひろゆき
中嶋寛之

今日の大学院制度は研究者の育成のみならず、21世紀型の知識テクノロジストの創出をもめざしたものといえます。それは大学などの教職や国立スポーツ科学センターなどの研究職のみならず、企業や自治体などから大学院教育で培われた企画力やデータ処理能力を買われ、現代社会の最先端で活躍している卒業生が近年増えていることからもうかがわれます。

日本体育大学大学院は、優れた指導陣のもとに豊富な題材と独創的なアイデア、そして恵まれた環境を生かしての幅広い研究指導の実践を大きな目標としています。

したがって、入学する院生の身分・国籍・職業・専門分野・スポーツ種目など背景も多彩なため、相互交流や情報の坩堝としての効果も見逃すことができません。

今後は、これまでの大学院における主だった研究テーマを統合し、いくつかの柱をつくり研究の継続につなげるとともに、体育大学として学会のみならず社会にも意義のあるメッセージを発信していくのが大学院の使命と思います。

学科の特性を踏まえ、武道教育の充実を一層図っていきたい。

武道学科長
はかまだだいぞう
袴田大蔵

全国に数ある武道学科の中で、本学の武道学科は日本で最初に開設された(1965年)学科として知られています。以来、自らを磨くとともに、日本の伝統文化を維持・継承していく人材の養成という理念に立って、武道の国際化の趨勢に対応しながら拡充してきました。2000年には「伝統芸能コース」を開設し、「武道教育コース」と2コースに分けて武道の国際的な指導者を養成しています。そのため、いずれのコースにも海外での「伝統文化交流実習」を課し、武道・舞踊の実演会などを通して国際感覚を磨いてもらうことにしています。

カリキュラムでは、武道教育コースは、2000年に従来の柔道・剣道・相撲に、空手・少林寺拳法・なぎなた・合気道・弓道を加え、9種目ある現代武道の内、8種目学べるよう充実させてきました。

一方、伝統芸能コースは完成年度を迎え、この3月に13名の卒業生を送り出すことができました。開設して4年ということもあり、まだ社会の認知度は低いのですが、日舞・能などの伝統芸能の継承者の養成という設置目的の実現に向け、武道教育ともども教育内容をより一層充実させ、発展させていきたい、と思っております。

◆◆◆◆◆

社会で本物の実践力を発揮できる生涯スポーツの指導者育成を目指す。

社会体育学科長
おおでかずみ
大出一水

社会体育学科の新しい時代を目指すニューコンセプトは、自治体における地域スポーツで活躍できる人材、社会体育・行政で活躍できる人材、民間余暇産業や学校での野外教育・自然環境教育や野外スポーツで活躍できる人材、障害スポーツでの障害者のパートナーになれる人材の育成が本学科の目標であります。それは、今や世界の情報化は急速に発展し、生活文化の国際化が進み生きがいのある豊かな生活が創造されるという、いわゆるウェルビーイングを創造することであります。そしてその核心は人類ひとり一人の幸せな生き方を根源的な意味で見つめてみる時代でもあり、その意味で私たちはひとり一人のメンタルヘルスが求められている時代と考えます。本学科の指導者の育成はここを大切にした取り組みを推進しながら生涯スポーツの世界で磨かれた実践力で貢献していきたいと考えています。

学科の特性を打ち出し、学生の負担を軽減する方向で、カリキュラムの見直しを図りたい。

体育学科長
おがわこうぞう
小川幸三

2000年カリキュラムの完成年度を迎え、体育学科ではその見直しと同時に、改革の方向性を明確にすることを決定し、より時代のニーズに合った学科の特性を打ち出す方向で合意されています。しかし、さまざまな検討課題が山積しているため、具体的な計画はまだ白紙に近い状態です。

検討課題の一つは、本学の使命である競技力の向上、特に「トップアスリートの養成」は、体育学科が中心となって目指すべき課題である、と考えています。トップアスリートに対する処遇・指導は未解決で、制度化に向けた今後の検討課題ですが、昨年から「スポーツ推薦入学者」だけのクラスをつくるなど、取り組み始めています。

また、選択科目が多く学生の負担が大きい現行カリキュラムは、必要単位数が取れるよう、できるだけスリム化する方向で調整を図りたい、と思っています。

2号館の火災以降、教室問題などで学生には不便な思いを強いています。できるだけ早く、より良い教育環境を整えてあげたい、と思います。前任者からの課題を継承しつつ、教職員の皆さんの智恵を結集して少しづつ改善していきたい、と考えています。

◆◆◆◆◆

スポーツのできる養護教諭・社会福祉士の養成という本学科の特性を展開したい。

健康学科長
さくらいただよし
櫻井忠義

国民の健康への関心・希求が高まる中、真に個人の健康を考えた指導がなされているか疑問に思われるほど、不適切な情報・知識、薬の乱用、他人任せの健康法がまかり通っています。健康に過ごすには自制・洞察・知識と、それに伴う行動が必要とされます。そのため、健康に関わる広い知識と深い洞察力を有した、慈愛に満ちた健康指導の人材が社会的に必要とされているのです。

こうした社会的要請に応えるべく健康学科では、子供たちの健やかな発育と高齢者の和やかな人生、社会人の壮健な活動を支援することを目的に、養護コースと社会福祉コースが設けられています。両コースとも、健康に関する学問を修め、広く社会の健康・福祉に携われる人材を育てることを目標にしてますが、スポーツのできる養護教諭、社会福祉士の教育は本学をおいて他に無く、運動を通じて健康を語れる指導者の存在は、今後の日本の教育や社会生活の中でも貴重な存在であります。そうした本学科の特性を認識しつつ、養護・社会福祉の現場で必要とされる教養や専門的知識を身につけることができるよう指導に当たりたい、と思っています。

“ファーストステージ”としての2年間を実り多いものにするために。

体育科長
村本和世（むらもとかずよ）

体育科には学校体育と生涯スポーツの2コースありますが、学生の多くが学部への編入学を目指していることもあり、両コースとも“ファーストステージ”的意味合いが強くなっています。そのため、2年間で基本的なモノの見方・考え方を養い、かつ、次に向かうステップへと位置付けた人間性豊かなからだと心を育てる教育を行っています。

まず、学校体育コースでは、保健体育2種免許状取得のカリキュラムにしたがって教育実習へ向けての力量を身につけさせるための方策をたてています。生涯スポーツコースでは、社会的な経験を積む中で社会の厳しさを知ってもらえるよう、他学科・科に先駆けてインターンシップを実施、また、このコースでは、平成12年度からは、国際的視野に立った国内では得られない専門的刺激を受ける知的機会として、米国で10日間の「国際交流実習」を実施しています。もちろん、保健体育2種免許状取得も可能です。

今後も、学生が充実した2年間のキャンパスライフを送り、ひとりの人間として社会に巣立って行けるよう、教育環境の整備に努めるとともに、学生一人ひとりとよくコミュニケーションを取りながら、丁寧かつ厳しく指導していきたいと思っています。

◆◆◆◆◆

保育士資格が取得できるコースの設置実現に向け踏み出したい。

保育科長
時本久美子（ときもとくみこ）

本学保育科では、平成18年度を目途に、保育士コースの設置実現に向け一歩踏み出そうとしています。保育科の上に専攻科を設け、3年間で保育士の資格を取得できるようにする案が現在、検討されています。行政では幼稚園と保育園の二つの機能を一つにする方向にあり、実際、公立幼稚園では幼稚園教諭と保育士の2つの免許資格がなければ採用しないところもあります。そのため、卒業後、保育士の資格を取るために専門学校に入る人が、ここ数年少しづつ増えてきています。設置が実現すれば、念願だった両方の資格が取得できるようになる訳です。

ところで、本学保育科は“就職率100％”の通り、私立幼稚園には希望者全員が就職しています。とはいえ、近年は、幼児教育を重視した幼稚園に行くより、保育を重視した保育園に就職したがる傾向があり、幼児教育の専門家を養成する開設目的から見て憂えべき状況にあります。そうしたことも踏まえ、学生には、子どもを楽しく教育・保育する幼児教育の素晴らしさを実感してもらえるよう、カリキュラムを更に充実させるとともに、きめ細かな指導を心掛け、より高い資質の幼稚園教諭を養成していきたい、と考えています。

ものごとを構造的に、システムとして捉える力を育む。

教養・教職科長
黒田　稔（くろだ　みのる）

教養課程を大学教育という視点で考えますと、体育・スポーツの学問領域は、自然・人文・社会科学と非常に幅広く、教養科目もそれに対応させる必要があると思います。そういう意味で、本学でも、例えば“スポーツと環境”など学際的な要素を取り入れたカリキュラム編成が行なわれていますが、将来的には教養・基礎・専門との区別が無い、より複合的で学際的な科目が増えて行くと思います。また、教職課程では教員のみならず、キャリア教育を含む自らのスキルとなるためのエクササイズ科目も必要です。そのためにもIT化やグローバル化に対応できる場や機会となるシステムをどのように構築して行くかが、今後の課題ではないでしょうか。

学生諸君は、教養・教職科目を通し検索力とか思考力や創造性を身につけ、ものごとを構造的に、システムとして捉える力を育むことが重要だと思います。自分なりに目的を持って入学してきますが、目的を達成するために何をどのようにしなければならないのか、学問的構造や大学の教育システム、そのプロセスが見えていないのだと思います。今後、皆さんがゴールまでのプロセスをどう描くのか、我々が果たすべき役割は大きいと実感しています。

◆◆◆◆◆

実践を通した教育で、「生きる力」を育てたい。

短期大学部長
井筒次郎（いづつじろう）

全国の短大の多くが定員割れを起こしている状況の中で、本学は多くの学生を迎えることができています。これは、社会に対し良いイメージを発信できているからだと思いますが、その背景には2年間を通して、きめの細かい指導を徹底している結果だと確信しています。こうした伝統をしっかり維持し、また、「体験学習」として昨年から実施している富士登山など、本学独自の試みについても発展的に継承していきたい、と考えています。

その反面、授業が多く組まれている関係で、学生に余裕がないということも見受けられます。その対策として、体育科では行政とのタイアップでボランティア活動を実践させるなど、課程の中に「体験学習」を組み込み単位として読み替えていくことも検討する必要があると思います。また、保育科では保育士コースの設置が検討課題として引き継がれていますので、実現に向けたプログラムの作成も必要です。

「全ては学生のために」が私の原点です。実践的な教育により社会の厳しさを体験させながら、学生自身が「生きる力」を育み、日体で学んで良かったと実感できる教育環境にしていきたいと考えています。

学生の目線に立った“きめ細かい”教育・指導体制の確立を。

教務部長
山田　保（やまだ　たもつ）

当面の課題としては、2005年度に向けたカリキュラムの整備、入試制度の見直し、さらに学生に対する教育・指導のあり方などが上げられます。懸案事項であるトップアスリートに対する処遇についても、今後制度化に向けた検討が必要になってきます。

カリキュラムの整備については、既に各学科単位で検討が進められてきていますが、教員免許法改正に伴う見直しや、短大保育科における保育士免許取得など、具体的な動きに対応する必要があります。入試制度については、AO入試制度導入の検討や社会の動きに見合った試験科目の検討がその主な内容となります。また、学生教育・指導のあり方については、今までにも増してきめ細かい、学生の目線に立った指導が必要であり、教員や事務組織、クラブ間の横のつながりの中で、どのような教育・指導体制を確立していくのかが大きな課題であると考えます。

実態調査の実施を通して、学生の本当の思いを把握したい。

学生部長
伊藤直樹（いとうなおき）

1年生～4年生までの全学生を対象に、「学生生活の実態調査」を今秋、実施の予定です。時代や社会の変化の中で学生気質が変わってくるのも当然ですが、この調査を通して、現在の学生が学生生活で何を感じ、何を求めているのかを把握し、施策に反映していきたい、と思っています。とはいえ、時間・ルール・マナーを守る「日体大生らしさ」は失わないよう、指導していきたいと思っています。

学生部は、他の部署とは異なり学生との接点が一番多く、キャンパスライフを送る学生にとって最も身近な窓口です。今後とも、「全ては学生のために」という立場から、福利厚生業務を充実させるなど、学生生活を全面的にバックアップしていきます。そして、一人ひとりの学生とのコミュニケーションを大切にしながら、暖かく接していきたい、と思っています。

新たな職域を開拓し、多様な進路を学生につくってあげたい。

就職部長
西尾末広（にしおすえひろ）

教員採用はここ十数年、厳しいものがありましたが、研修会や採用試験講座の開設など、この間の充実したきめ細かい対策が実り、教員採用の数字は少しながら上がってきています。私も前任者の対策事業を継承しつつ、教養・教職の先生方との連携を深めながら、より一層対策事業を手厚く展開していきたい、と思っています。

本学の学生の場合、教員でなくてもスポーツ関係の指導者にはなりたいと思って入学してくるケースがほとんどです。現状は、そうした学生に教員がだめなら民間企業、という二者択一の希望しか与えられていません。しかし、今まで手つかずの教職員の人脈を活用すれば、小さなスポーツクラブでも、今以上に新たなスポーツ関係の職域を開拓できるのでは、と考えています。教職員・OBの持っている人脈をもう一度整理するとともに、さらにきめ細かい充実した対策を施していきたい、と思っています。

きれいで、整然として、活気溢れるキャンパスにしたい。

健志台教学局長
清原伸彦（きよはらのぶひこ）

私が若い頃の日体大は活気に溢れていました。多くのクラブが狭いグランドにひしめき合い、熱意を持った指導者が率先垂範し、学生は礼節を重んじ、指導者を信じて日夜練習に励んでいたのです。今やグランドや体育館も整備され、すばらしい環境になりましたが、当時の活気や学生の日体大生気質はどこかに失せてしまったかのようです。

私がこの度の就任に際し、胸に思い描いたことの一つは“人づくり”です。心身ともに健康であり、常に自らを鍛えるという前向きな学生の姿であり、それは元気で強い日体大の“心”を今の学生に伝えていくことでもあると考えています。そして、きれいで、整然とした静かなキャンパス、さらに地域とのコミュニケーションも深めながら、あらゆるスポーツが織り成す活気溢れるキャンパスにしたいという熱い想いです。前任者の仕事を継承しつつ、皆さんの知恵を結集して、一歩一歩実現させていきたいと考えています。

改革の早期実現を願う。

学長室長
谷釜了正（たにがまりょうしょう）

長谷川学長には引き続き本学の教学の最高責任者として陣頭指揮を執って頂くことになりましたが、ソフト面とハード面の両面に渡って学長は改革を断行されます。

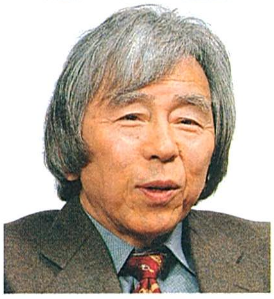
私は、その学長の改革への強い意志を受け止めると共に、その改革が一日も早く実現するよう全力を尽くしたいと考えています。

図書館長
さいじょうおさみつ
西條修光

深沢の再開発による施設の拡充が求められています。

日体大の図書館は、体育系大学の中で最大の蔵書数37万～38万冊を誇り、学生の学習、教員の研究の上で非常に充実した内容になっています。貸出冊数は、5万冊、入館者数も18万2569人(2002年度)と、多くの学生や教員、一般の方々が利用しています。しかし、蔵書数の増加に伴い施設が狭く、読書する机も学生数に比し少ないなど、深沢の再開発による施設の拡充が待ち望まれています。また、深沢2号館の焼失に伴い健志台での授業が増えており、健志台分館の一層の充実が求められています。

新施策としては、クラブの練習時間の関係で利用できないという学生の要望に応え、開館時間を延長し、この4月から7時まで開館します。また、卒業までに読んでおいてほしい「指定図書」は、充実してきており、この制度は引き続き維持していきたい、と思っています。



体育研究所長
いとう　たかし
伊藤　孝

大学院とのタイアップによる総合的な研究活動の構築を。

体育研究所は、2号館の火災により研究データや測定機材など多大な被害を受け、現在、暫定的に旧第二学生寮内に移転して研究活動を継続しています。徐々に本来の体制を整えていきたい、と考えています。

昨年40周年を迎えた体育研究所は、研究領域を人文社会・自然の2科学系で、かなりの研究成果を上げるまでになりましたが、大学の附属施設という位置づけの中で、その限界も見え始めてきました。更に質の高い研究業績を上げるためには、将来的に施設・組織・システムすべてに渡って、独立した研究所としての機能を有することが望ましいと考えていますが、当面は大学院とのタイアップにより、総合的な研究活動をいかに構築していくのかが課題であると考えています。

スポーツ
トレーニング
センター所長
せきぐち　おさむ
関口　脩

トレセンは、選手・指導者・研究者が有機的に結合する現場。

スポーツトレーニングセンター(以下「トレセン」)は年間利用者数が延べ8万人を数え、大学の中で一番利用されている施設といえます。トレセンの活動において、各運動クラブに対するトレーニングプログラム作成とそのプログラムに則った指導は、トレセンが培った研究成果と経験という資源を運動クラブや学生に還元できる直接的なものであり、重要な活動であると考えています。

スポーツの強化において、研究者と現場の指導者とのギャップが問題になりますが、それを埋める現場がトレセンであり、選手と指導者と研究者の三者が有機的に結合することによって、初めてスポーツの強化が実現できます。現在の課題は、両キャンパスのトレセンともに少人数のスタッフで運営となっていますが、今後は、さらに十分な指導体制の確立に向けて努力したいと考えています。

スポーツ局長
しみずよしあき
清水義明

“競技力の日体”、“実技の日体” 復活のために。

私は、長年バスケットボール部長として、その強化に尽力してきた訳ですが、今回はスポーツ局長として、日体大全体における競技力向上の牽引役になることとなり、身が引き締まる思いです。

昨今、日体大の競技スポーツにおける競技力の低下が囁かれていますが、そこには学生気質の問題やリクルーティングの難しさなどがあります。この点については、現場の指導者の視点で、より効果的なサポート体制を確立していくとともに、更に現場の指導者が、情熱を持ち続けて指導を続けていくための、動機づけとなるような制度の創設についても検討していきたい、と考えています。

駅伝はもとより“競技力の日体”、“実技の日体”復活という、日体大関係者の共通の願いに後押しされながら、一つ一つの課題に取り組んでいきたいと思います。

健康管理
センター所長
おおの　まこと
大野　誠

教職員、学生の健康管理に最善を尽くしていきます。

本センターにおける重要な仕事として、年1回の定期健康診断の実施や衛生委員会の運営などがあります。平成13年度から、定期健康診断で発見された“死の四重奏”(肥満、糖尿病、高血圧、高脂血症)に該当する者については、精密検査、二次検査の費用が労災保険で給付されることになったことはよく知られています。また、衛生委員会はこの4月から実施される構内全面禁煙なども含めてトータルな健康管理の施策を立案・実行する組織です。

最近増えている過労死や突然死の大部分は脳卒中や心筋梗塞ですが、原因は動脈硬化で、その危険因子が先の死の四重奏という訳です。その対策として今、軽度の運動の積み重ねである“ちょこまか運動”が奨励されています。本学教職員の健康の保持、増進に何かとお役に立てれば幸いです。

寮監長
むらかみ　おさむ
村上　修

体育大学の生活に相応しい場にするとともに、いい集団をつくりたい。

核家族の中で育ってきた子どもたちは、友達と力を合わせ何かをやり遂げた経験が少なく、集団生活に馴染めない学生もいます。そういう若者たちに対し、寮の集団生活の中で新しい自分を発見し、自分を鍛え、自立した人間として育ち行く場にしたい、と思っています。

また、体育大学に相応しく、寮は激しい練習に耐えうる休息・睡眠・栄養をとる生活の場にしていきたい、と思っています。学生による自主的な運営の下で、社会人・体育人の基礎や指導者のあり方など集団生活の中で学ぶことは多くあります。上級生が下級生を指導しますが、下級生は指導する立場の人間の気持ちを推し量る、また上級生は下級生を日体大の兄弟として大事にする、そんな良い集団の寮づくりをしてみたい、と考えています。

特集2

学生の声・リーダーズキャンプ

現状のさまざまな課題に取り組み、少しでもみんなのためになるよう、学生の声を大学に届けていきたい。

新しい日体大を創るべく、この4月に長谷川学長のもと大学・短大の新執行部が発足し、二期目がスタートする。改革への検討課題と改革の方向性は「特集1」で語られているが、改革には大学・短大を構成する教職員・学生のエネルギーが結集しなければ実現しない。その一翼である学生は、現状をどのように感じ、どう変えていきたいと考えているのか。

そんな状況下の本年2月11日、今年で第14回目を数える恒例の「リーダーズキャンプ」（学友会主催）が開催された。会場の国立オリンピック記念青少年総合センターでは、新しく選ばれた約160名の各クラブ・サークルの代表者が2日間にわたって現下のテーマを真剣に討議した。改革の一翼である学生の声の一端を、会場から報告したい。

本学のクラブ・サークルは全て「学友会」に所属し、その指針に基づき、それぞれのクラブ間の協力・共同の中で活動しています。その学友会が主催する「リーダーズキャンプ」は、毎年2月、新しく選ばれた各クラブ・サークルの代表者が一同に集い、1泊2日間でキャンパス内の諸問題を話し合うものです。その目的は、学友会の招請状にもあるように「普段、学生間で起こっている問題、大学に対する疑問についての率直な意見交換を行いながら解決・改善へと導き、相互の理解と親睦を深め、リーダー育成と体育人としての意識向上を図る。また、長い歴史をもつ日体大の学生であることに誇りを持ちつつ、新しい時代の流れに沿った見解や知識を取り入れ、学友会全体の活性化に繋げていく」ところにあります。

毎年、学生生活にとって緊要な問題がテーマとなりますが、今年の中心テーマは、『自分が考えるリーダーとしての心得』。その趣旨は、①リーダーとしての自覚を深め、より質の高いリーダーの育成をする②各リーダーの理解と親睦を深める、ことにあります。また、選択討議として『クラブ・サークルの昇格・降格の条件』、『大学内設備の利点、難点について』、『体育大生の喫煙をどう考えるか』の3議題が提出されました。特に、この3議題は、4月から実施される「キャンパス内全面禁煙」や施設問題に対し、白熱した討議が繰り広げられました。

■第1日目

第1日目は、9時30分の開会式から始まり、学友会会長の長谷川正明学長の挨拶や学友会役員・総務委員の紹介などの後、学友会副会長の池田敬子教授の講話があり、午後1時より中心テーマである『自分が考えるリーダーとしての心得』を11班の分科会に分かれて討議しました。その討議を受け、5時より全体発表が開かれ、質疑応答を含めた各班の討議内容が発表されました。以下に、一部ですが、各班の討議内容を幾つか紹介します。

●一つのチームとしてまとまってスタートした以上、全員で目標を達成させるようにする。上級生は何人もいるが、リーダーは一人しかいない。皆が怒っている時は励まし、皆が喜んでいる時は引き締めるような、皆と違った言動を取る勇気が必要となってくる。（1班）

●クラブ・サークルの顔なので、態度で示すことが重要。後輩の失敗は自分の失敗として受けとめる。責任を自分が取る。（4班）

●人の気持ちがわかり、どんなときも冷静であり、精神的にタフ。マネージャーになってもプレイヤーの立場で考えて話す。自分の言ったことに責任を持つ（6班）

●部員一人一人を把握し、チーム全体の意志疎通を図る。（8班）

●選ばれたという自信を持ち、自分らしさを出す。（9班）

●自分が部員から何を求められ選ばれたリーダーなのかを常に意識して行動する。（10班）

■第2日目

2日目は、9時の朝会から始まり、筒井大助助教授の講演（演題は『リーダーとしての心得』）の後、10時30分より、3つの選択討議を行うために11班の分科会に分かれて討議しました。議題1の『クラブ・サークルの昇格・降格の条件』は7班・8班・9班・11班、議題2の『大学内設備の利点、難点について』は1班・3班・5班・10班、議題3の『体育大生の喫煙をどう考えるか』は2班・4班・6班の担当です。

井筒次郎教授（就職部長）の講話をはさみ、午後3時より、各班での討議を受けた全体発表が開かれ、質疑応答を含めた各班の討議内容が発表されました。以下に、一部ですが、各班での討議内容を幾つか紹介します。

[議題1] クラブ・サークルの昇格・降格の条件

●降格の条件がないため、いろいろな問題が起きるのではないか。社会的問題を起こしたクラブ・サークルは即刻、降格という厳しい罰則を設けるべき。また、昇格の条件を満たす活動をその後していないクラブもあるようで、問題が多いと思う。

●サークルからクラブに昇格するには厳しい条件があるのに、クラブからサークルに降格の条件がないために、クラブでありながら活動実態の見えないクラブもある。そこで、部員数を決め、何年か在籍がゼロなら降格、という案はどうだろうか。

[議題2] 大学内設備の利点、難点について

●2号館が無くなり、その中にあった部室などが無くなった。このまま放置しないで、埋め立てたり整備すれば、多目的広場として利用できるのではないか。深沢も健志台も多目的広場を復活させて欲しい。

●深沢キャンパスは部活動の場所が少ない。敷地が狭いので空間をうまく利用した施設作りが必要だと思う。

●大学側が2号館の建設予定を明確にしていただけると、学生に分かりやすくなる。

●新授業の更新など、情報の更新をHPに載せれば、多くの人が効率よく掲示板を利用でき、しかもHPで調べることができる。

●食堂は栄養バランスを考えたメニューが必要。また、学生数に見合った学食のスペースを広げるべき。

●深沢にミーティングルームができて、意見交換がし易くなった。また、シャワールームが夜11時まで使用でき、休日も使えるようになったのは嬉しい。

[議題3] 体育大生の喫煙をどう考えるか

●全面禁煙により、トイレで吸う人、校門付近での喫煙者が増えるだろうし、マナーが悪くなり、学校の周りが迷惑する。

●公立学校では教師の喫煙を認めなくなりつつある。教員を目指す学生、また一流のアスリートを目指している体育大生にとってたばこは有害。自覚を持つべき。

●非喫煙者にとっては、副流煙を吸わなくてすむ。

●学内で喫煙が発見された場合は、クリーン大作戦など清掃活動へ強制参加させてはどうか。

4時30分より、応援部統括部長の千葉吟子教授から、全体発表、特に禁煙問題の講評がなされ、「新しいことをやって成功するには、必死の努力の裏付けがないとできない。大学も頑張るので、皆さんも必死になってやり遂げてほしい」と、その意気込みを示される形の閉会の辞があり、2日間にわたるリーダーズキャンプは閉幕しました。

《総務委員に聞く》

学友会総務委員会委員長
志田裕介（しだゆうすけ）

学友会総務委員会副委員長
杉本裕行（すぎもとひろゆき）

リーダーズキャンプチーフ
藁谷智彦（わらがいともひこ）

―総務委員会として1年で大事な行事は？

志田●春と秋の2回の総会と、このリーダーズキャンプですね。

―リーダーズキャンプのテーマ決定はどのようにしているのですか？

藁谷●初日の中心テーマは、毎年、変えるほどのことのない基本的なテーマを設定し、2日目の選択討議のテーマは、毎年、その年にあったものに変えています。今年は、4月から全面禁煙が始まるので、取り上げました。

―学友会総務委員会として、今年度の方向性は？

志田●総務委員会においては信用というものが大事です。ですから、新しいことをするというより、基本的な仕事を確実にこなしていきたい、と考えています。また、4月から始まる「全面禁煙」は、僕は喫煙者ですが、正論と捉え、総務委員会として全面的に協力していきたい、と思っています。

―他に、総務委員会の仕事として決まったものがありますか？

杉本●毎月、開く代表者会議です。「クリーン大作戦」という清掃活動についての質問・連絡・確認事項などの周知徹底の場です。この清掃活動は、6回実施しているんですが、参加人数が増え、300人を突破しました。美化意識を高め、日体大の誇りを忘れずに持ち続けるという意味で、続けていきます。地域の方々との連携を取りつつ、学外の方も参加できるものとして確立していけたらと、来年の目標ですが、思っています。

―今後、どんな大学になってゆけばいい、と思いますか？

藁谷●学生のまとまり感、一体感が失われつつあると、思うのです。それを回復するのは大変難しいですが、一人一人が信念を持って、何か大きな目標に向かっていけば、そのプロセスを通して少しづつ一体感が出てくるのではないでしょうか。

2本の縄の中を華麗に跳びながら出入りする不思議なスポーツ。

[ダブルダッチサークル]

池田 欣央

(04年3月健康学科卒)

ダブルダッチって何？と思う人の方がまだまだ多いのでは・・・・。それはアメリカで始まった2本の長い縄を使って行うスポーツである。子どもの遊ぶ縄跳び？と思ってはいけない。2本の縄の中で、リズムに合わせて華麗な回転技を見せながら出入りする、演技スポーツである。世界大会で二連覇している池田君に、その魅力と醍醐味を熱く語ってもらった。

—ダブルダッチを始めたのはいつ頃からで、キッカケはどのようなことだったのですか？

池田●中学・高校とサッカー部でしたが、高校3年生の時、ダブルダッチをやっていた友人から誘われたのがキッカケです。やってみると不思議なスポーツで、その魅力にいっぺんに引きつけられてしまいました。

—日体大へ入学した動機・理由は何だったのですか？

池田●担任の先生が日体大出身で、海浜実習の思い出などキャンパス生活を語ってくれ、楽しそうな大学だなと思ったことと、自信のある科目が体育だったからです。でも、本当は、ダブルダッチを通じての仲間が日体大に入学して活動しており、自分も本格的にやりたくて入学したのです。

—サークルの創立の経緯と活動状況を教えてください。

池田●ダブルダッチの仲間が日体大入学後の98年に活動を開始したのが、サークルの発足です。公認サークルに昇格したのは02年で、正式に創立されてまだ2年のよちよち歩きのサークルです。現在、部員数は約70名で、幾つかのチームに分かれて、大会への練習に励んだり、ボランティアで全国に出かけ普及活動をしています。

—ダブルダッチはどういうものか、ルールや競技大会について教えてください。

池田●ダブルダッチは、昔、ニューヨーク港に交易で来ていたオランダの縄商人が遊びとして米国人に教えたのが始まり、と言われています。2本の長い縄を使って行うスポーツなんですが、小学校の頃やった縄跳びを思い出してもらえば判りやすいと思います。あれは1本の縄の中を跳ぶのですが、こちらは2本の縄を内側に交差させて回し、その中で跳んだり、回転技を見せたりするスポーツです。ルールは簡単、ターナー（縄を回す人）とジャンパー（跳ぶ人）が途中で入れ替わることです。演技時間は3分で、技術点／構成点／パフォーマンス度／リズム感の4つで得点が決まります。音楽を流しながらそれに合わせてリズムを取ったりする方が点数になります（フュージョン演技）。演技者の数は、世界大会は必ず女子2人を含む5人と決まってますが、それ以外では特に人数は決まってません。

世界大会は6月（サウスカロライナ）と12月（ニューヨーク）に米国で開催される大会が2つあり、おのおの性格が違います。6月の大会は体育館で行われ、スポーツ性の強い大会。12月はアポロシアター劇場で行われ、会場の盛り上がりも点数に入るパフォーマンス性の強い大会ですから、観客も味方に付けなければなりません。国内では、ダブルダッチ・コンテストと、神戸と東京で開催される二大会の3つあります。特に神戸大会は翌年6月の世界大会への選考会を兼ねた重要な大会です。

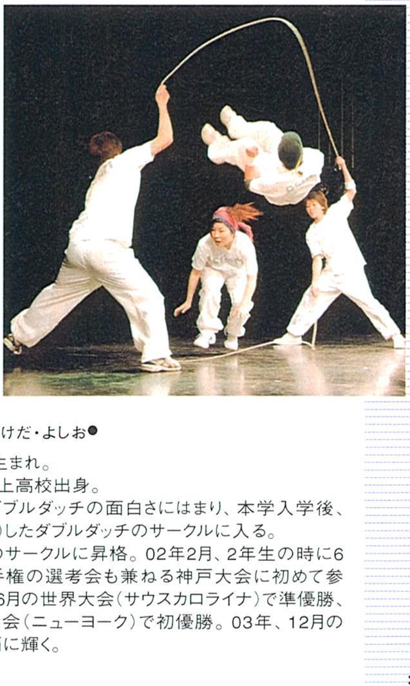
—ダブルダッチの楽しさ、醍醐味、難しさを教えてください。

池田●ダブルダッチは2本の縄と平らな場所さえあれば、子どもから大人まで気軽に楽しめる点がいいですね。難しさは、縄跳びと違い、2本の縄が来るので一拍置く休憩がない点です。ジャンパーは慣れればすぐ跳べるようになるのですが、ターナーは2本の縄を一気に回すタイミングが難しく、相当練習しないとできないです。技を5つくらい連続させるのはかなり難しく、練習で決められても、大会でできないことが多い。ターナーとの呼吸があるからです。大会で5人の呼吸が合って、技が決まった時の醍醐味はたまりませんね。

—最後に、これからの夢や抱負を聞かせてください。

池田●金融関係への就職が決まってますが、社会人になってもボランティア活動を続けながらダブルダッチを広く普及していきたい、と思っています。

(2月16日、東京・世田谷キャンパスにて)



PROFILE●いけだ・よしお●

1981年神奈川県生まれ。
神奈川県・私立向上高校出身。
高校時代から、ダブルダッチの面白さにはまり、本学入学後、仲間が結成（98年）したダブルダッチのサークルに入る。
02年、大学公認のサークルに昇格。02年2月、2年生の時に6月の世界大会選手権の選考会も兼ねる神戸大会に初めて参加、準優勝。同年6月の世界大会（サウスカロライナ）で準優勝、同年12月、世界大会（ニューヨーク）で初優勝。03年、12月の世界大会で二連覇に輝く。

初めての世界挑戦で柔術の本家に迫る銀メダル!!

[ブラジリアン柔術]

寺島 瑠依

(04年3月健康学科卒)

K-1人気の影響から知られるようになってきたブラジリアン柔術。そのルーツは講道館柔道にあるとはいえ、今やブラジルを代表する格闘技である。その本場で開催された世界大会で、初挑戦ながら銀メダルを獲得した女子格闘家がいる。寺島瑠依さんである。"今"が一番充実している寺島さんにとって、ブラジリアン柔術の醍醐味とは……。

—ブラジリアン柔術を始めたのはいつ頃からで、キッカケはどのようなことだったのですか?

寺島●高校1年から極眞空手をやり始めたのですが、直ぐに大ケガをしてしまい、打撃ができなくなってしまいました。そんな時、偶然、寝技の競技を観る機会があり、"面白いな"と思ったのがキッカケです。それが、打撃は一切なしの、寝技だけのブラジリアン柔術だったのです。始めて6年経ちますが、練習すればするだけ実力がつくので面白くて、ここまでハマッて来てしまった、という感じです。

—日体大へ入学した動機・理由は何だったのですか?

寺島●高校3年生になった頃、養護教諭になりたくて、クラス担任の先生に目指せる大学は何処か相談したところ、いろいろ調べていただき、日体大を紹介してくれたのです。また、その頃は柔術にのめり込み始めていたので、就職せずに柔術を続けたいという思いと、身体のことをもっと知りたくて入学しました。

—ブラジリアン柔術とは、どんな格闘技なんですか?

寺島●K-1人気の影響から知られているグレイシー柔術もブラジリアン柔術の一つですが、そのルーツは講道館柔道の前田光世氏がブラジルでグレイシー一家に柔術を教えたことから始まった、と言われています。組技を基本に寝技が主体の格闘技です。チョーク(首締め)が認められているので、たまにギブアップをせず窒息失神してしまう選手もいます。段位はなく帯制で、白から順番に青・紫・茶・黒とレベルが高くなっていき、日本では紫以上はプロとして扱われます。試合は帯の色と体重別(女子は3階級)に分かれて行われ、私は紫以上の中級(60.9kg以下でレヴィ級の呼称)で出場しました。試合時間は、紫の場合、7分です。この時間内に相手をタップ(参った)させ1本取るか、より多くのポイントを獲得した方が勝ちになります。ポイントで大きいのは、相手を仰向けまたはうつ伏せの状態で馬乗りになる態勢で、4ポイントもらえます。柔道とレスリングを、足して半分に割った感じですかね。

—昨年、世界大会で銀メダルを取られたそうですが、どんな大会なんですか?

寺島●本場ブラジルのリオデジャネイロで毎年開催される「ムンジアル」(世界選手権の大会名)は伝統があり、世界の強豪選手が参加してくる権威ある大会です。正直、初挑戦で銀メダルを取れるとは思っていませんでした。教育実習とケガでちゃんとした練習をしてなかったし、海外とは違い日本は予選がなく、連盟が許可すれば出場できるので実力の差が分からないからです。あれよあれよという間に決勝まで行ってしまった感じです。男子は敗退していて、決勝戦まで残ったのは女子2名だけ。日本人選手がみんな応援してくれているし、何としても頑張らなくては、という思いでしたね。銀メダルを取れたので、紫帯から茶帯に今回、昇段しました。

—4年間、日体大の部活にはない競技をされたわけですが、クラスみんなとの思い出はどのようなことがありましたか?

寺島●クラスにもいろんな部活の人がいるので、寮生活や部活を経験しなくても、そういう人たちと知り合い、話を聞くことができ、視野が広がるなど多くのものを得ることができた、と思います。また、日体大ならではのスポーツ界で高名な先生とも接する機会があり、体育学以外の有益な話も聞け、役立ちました。いろんな方々と知り合え、楽しく充実した4年間でした。

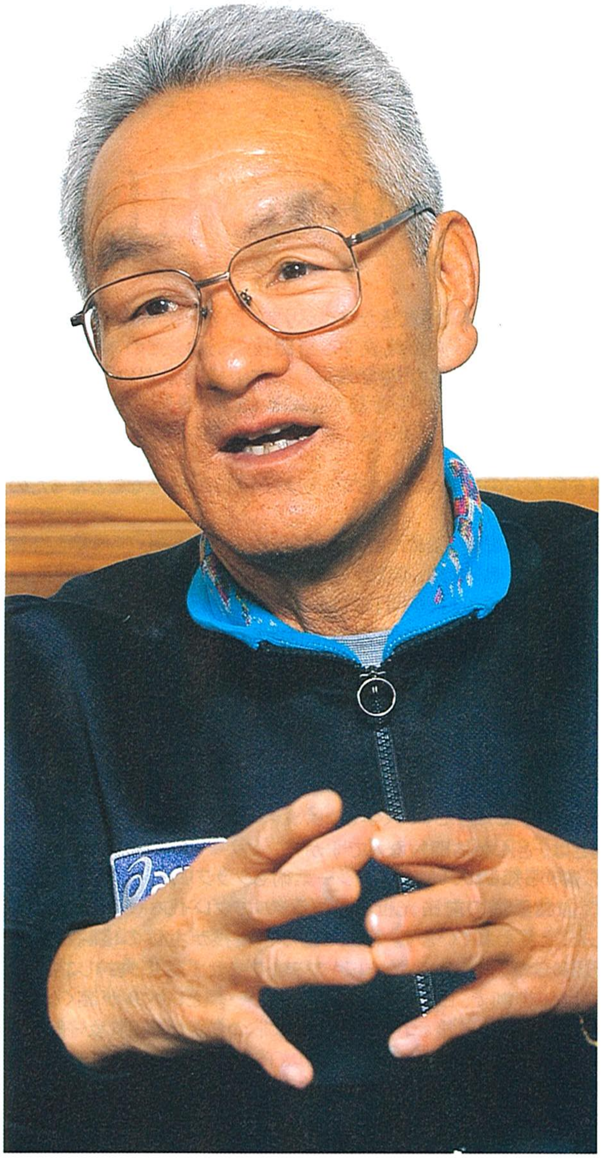
—最後に、将来の目標を聞かせていただけますか。

寺島●やはり目標は、来年のムンジアルで優勝すること、そして日本の女子ではまだ一人しかいない黒帯を取ることです。卒業後、指圧師の資格を取るために、4月から3年間専門学校へ通うので、帯取りと勉学を両立させていきたい、と思っています。

(2月16日、東京・世田谷キャンパスにて)

PROFILE●てらしま・るい●

1982年埼玉県生まれ。
埼玉県・私立武南高等学校出身。
ピュアブレッド大宮と東京イエローマンズに所属。
高校1年からブラジリアン柔術を始め、02年アメリカ太平洋選手権、青帯で優勝。



渡辺 公二さん

兵庫県立西脇工業高等学校陸上部監督

［1960年3月体育学科卒業］

"勝った時は選手の努力、負けた時は指導者の責任"を肝に銘じて選手指導に当たりたいものです。

「箱根駅伝」同様に、1本のタスキに夢を乗せて師走の都大路を疾走する「全国高校駅伝」は、数々のドラマを生み人々の胸を熱くしてきた。その高校駅伝で日本一に輝くこと、史上最多の8回を誇る最強チームが、神戸市の北西に位置する西脇市にある西脇工業高校である。しかし、西脇工は最初は全く無名の高校で、むしろ問題児の多い地元でも評判のよくない高校として有名であった。その無名校を駅伝一筋に30数年間かけて優勝の常連校に導いたのが、名将・渡辺公二監督である。しかし、その道のりは平坦なものではなく、「生徒たちに誇りを取り戻す」闘いの軌跡でもあった。

渡辺さんが6年間勤務した高校から同県内の西脇工に転任してきたのは、1968年、満30歳のとき。当時、西脇工は教室にはタバコの煙が立ちこめ、教員が襲われるなど、無気力で暴力沙汰の絶えない荒れに荒れた学校だった。この転任先は渡辺さんにとっては不本意なもので、「選手層の厚い、指導のやりがいのある県南の学校に転任するまでの3年間、ここで体育・保健教師として足りない勉強をしよう、という気持ちで来たのです」。だから、2年間、部活動の指導を何もしなかった。しかし、風紀の乱れた校内のあまりのひどさに、ある日「ゴンタクレ」の生徒を呼び、腹を割って話してみた。すると、「僕らに誇れるもの、何かありますか？こんな工業校に来たくなかった」と涙ながらに言う。「落ちこぼれで馬鹿にされ、プライドを傷つけられていた」のだ。その姿に、渡辺さんは「何とか、生徒たちに誇りを取り戻したい」と考え、「部活動を通じて人間性を育てるしかない」と決意する。こうして70年、自然消滅しかけていた陸上部の監督に就任する。

しかし、道のりは困難を極めた。何とか部員を集め、無理矢理出場させた最初の県内地区予選はビリから2番。ようやく3年目の72年から県大会に出場できるようになる。鬼のように年中無休のスパルタ練習を続けたらしい。その結果、77年、県大会で初優勝し全国大会に初出場する。そして、5年後の82年、遂に全国優勝を果たす。監督就任から12年経っていた。しかし、その後は思うような成績を残せなかった。名実共に頂点に立つのは、50歳を過ぎた90年代に入ってからである。

「部活は選手づくりなのか、人間づくりなのか？と自問し、速い選手である前に、立派な高校生でなければならない、と考え直しました。選手として試合に優勝するより、"人生の勝利者"になってほしい。そのためには、明るく、礼儀正しく、責任感が強くなり、誇りや自信をもってくれたらいい、と思うようになったのです」。練習量を減らし、速く走れることよりも努力したことを褒め、ヤル気を起こさせることを心掛けるとともに、挨拶やルールを守る生活態度と体力・健康管理に重点を置く指導に変えた。「"心のタスキ"をつなげられるようになってから強くなった」という。92年以降、02年で優勝は6回を数える。

"心の監督術"を駆使すると言われる渡辺さんだが、「ここまで来られたのは、指導者は三流でも選手が一流でしたから」と冗談ぽく、持ち前の早口で語る。そして、「"勝った時は選手の努力、負けた時は指導者の責任"という気持ちを辞めるまで持ち続けたい」とも語る。

最後に後輩へのメッセージをお願いすると、「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、という言葉がありますが、何事もその気になって努力すれば必ず実現します。努力に勝る才能は無しです。目標・目的を持って精一杯努力してほしい」。"忍耐と努力"をモットーに人を育ててきた監督ならではの言葉であった。

（2月27日、西脇工業高校にて取材）

写真左：'04入学　北村聡くん

PROFILE ●わたなべ・こうじ●

1937年福岡県嘉穂町生まれ。

野球少年だったが、足の速さが見込まれ中学時代、郡内駅伝大会に出場、高校から本格的に長距離選手を目指す。56年4月体育学科に入学し、箱根駅伝を目指して陸上部に入るも、ケガで退部。60年3月同学科卒業後、大阪履正社高等学校に勤務、同時に野球部監督に就任。62年9月、兵庫県立社高等学校に赴任、陸上部監督に就任。68年4月兵庫県立西脇工業高校に転任、2年後陸上部監督に就任。以来34年間同部を指導、全国高校駅伝大会に18回出場し、史上最多の日本一8回（連覇2回）の偉業を達成する。教え子に、山口衛里（シドニー五輪出場）・小島宗幸・忠幸兄弟（びわこ毎日マラソン優勝）・別府健至（本学陸上競技部長距離監督）など、多数のトップアスリートや指導者がいる。現在、西脇工臨時講師、日本ジュニアオリンピックコーチ、日本陸上競技連盟ジュニアコーチ。

全国高校駅伝大会は、77年に初出場し、初優勝は5年後の82年、以後、7回（90・92・94・95・97・98・02年）優勝。日本陸連から平沼記念賞(86年)、西脇市民栄誉賞(96年)、兵庫県教育功労者賞／兵庫県スポーツ賞(98年)など、多数受賞。

何歳になっても活き活きと生きられるために、新しい刺激や養分を自分に与え、いつも心を燃やしていたい。

渡辺 瑞枝さん

元洗足学園大学教授

[1929年3月女子部高等科卒]

平均寿命が延び、人生八十年時代ともいわれるが、精神的に自立し創造的に心豊かに年を重ねていくことは難しい。しかし、94歳の現在も活き活きと活動し、指導を続けられているすごい方がいる。我らが大先輩・渡辺瑞枝さんである。渡辺さんは日体大のダンスの基礎をつくった方で、戦前の日体大の歴史だけでなく、日本の体操・ダンスの歩みを知る数少ない卒業生である。

渡辺さんが入学したのは、日体大が女子部と男子部に分かれ、体操学校と称していた昭和2年。女子部が京浜急行の雑色駅近くに新築した六郷校舎に移転した年である。当時は、「木造2階建ての寮1棟と2クラス分の教室。グラウンドは背丈ほどに伸びた雑草が茫々、というお粗末なものでしたね。でも、女子部創立以来の独立した新校舎ということで、みんな希望に満ち溢れて草抜きとローラーかけに汗を流したものです」。入学の理由は、「小学校教員だった姉の影響から」。当時、日体大は私立では唯一の男女の体操教員養成校だった。

時代は、大正後期から昭和初期。日本では体育活動が盛んになり、それまで主流だったスウェーデン式徒手体操と器械体操に加え、リズミカルで楽しいデンマーク体操が国内に広まり、さまざまな講習会が全国各地で実施されるようになった。そうした時代の新しい息吹の中で、向学心とバイタリティに溢れた渡辺さんは、入学後、学校では学べないそれらの体操を習得するために、学外の様々な講習会に積極的に通うとともに、日本に初めて制定されたラジオ体操第一の普及のために指導助手をしたりした。また、行進遊技といわれていたダンスも、「米国で新しいダンスを学んできた恒吉隆子先生に師事し、当時としては画期的なリズミカルで柔軟なダンスを学びました」。

そうした努力が実り、卒業後、渡辺さんは徒手体操とダンスの教員として、20歳の若さで日体大の教壇に立つことになる。現在もダンス部で演じられる「フラワーソング」の振り付けは、その頃の作という。終戦後は、都の教員採用試験を受け、昭和27年から定年退職する昭和48年3月まで、区立中学校で21年間体育教諭を勤め、退職後も、洗足学園大学で専任教授・非常勤講師として73歳までダンスを教え、53年間の長い教員生活を終えた。その間は、44歳で夫君との死別にあいながらも二人の子を育て、教員生活をしつつ日本女子体育連盟の理事やさまざまな公職においても奔走する、多忙を極める日々であった。

普通、70代といえば老境の域で、孫に囲まれてのんびり暮らすのが老後の姿と思われており、大概の人は新しいことに挑戦するエネルギーと勇気を持ちにくい。まして、忙しく人生を歩んでこざるを得なかった人にとっては。しかし、渡辺さんは70代半ばから太極拳や絵を習い始め、80歳からは気功を学ぶ。そして、86歳の時には、「老後を家族に寄りかからず自分らしく生きるために」、ケアハウスに移り住むのである。「人生は、まさに絶えざる未知への挑戦の連続であり、どんなに年齢を重ねても、もうこれでいいということはない」と、自著にも書かかれているが、その凛とした生き方が見えてくる。最後に、「人間も花と同じように、手入れを怠れば生気を失ってしまうんです。物事を始めるのに、遅すぎるということはない。自分の花を咲かせるには、手入れを怠らず、新しい刺激や新しい養分を自分に与えなければなりませんね」と美しくハリのある声で、優しく諭すように語ってくれた。ここには人生のお手本がある。生きていくパワーをいただけたような気がした。

(2月16日、東京・世田谷キャンパスにて取材)

PROFILE ●わたなべ・たまえ●(旧姓伊奈)

明治42(1909)年、香川県生まれ。
昭和2(1927)年、日本体育会体操学校(日本体育大学の前身)女子部高等科に入学。昭和4年卒業後、4月より同校で徒手体操・ダンスの教員になる。結婚後の同15年、夫の転勤に伴い中国北京に移住、北京第二高女と北京師範大学で教壇に立つ。終戦後は足立区立第三中学校に体育教諭として勤務。定年後も洗足学園大学で73歳まで教授・講師を続けるなど、戦前・戦後を通じてダンスの指導者として活躍してきた。平成8年、老後を自分らしく生きるために一念発起してケアハウスに移り住み、現在、気功やダンスの会をつくり、指導者の立場で汗を流している。
学校法人日本体育会評議員(最初の女性評議員)、日体大同窓会副会長、(社)日本女子体育連盟副理事長(昭和44年、国際女子体育会議の日本での初開催に尽力)の要職を歴任し、現在、日本体育会顧問、「関東女子同窓の集い」会長、ダンス部顧問。昭和56年勲五等宝冠賞授与される。平成13年、自立し創造的に生きる高齢者を表彰するニューエルダーシチズン大賞(読売新聞社主催)の第1回受賞者に選ばれる。著書『実り楽しむ』(関東女子同窓の集い運営委員会代表)。

秋の叙勲 二三三五人に
ひたむき人生 確かな重み

大学院の紹介

02

前号より本誌NITTAIDAIにて日本体育大学大学院の紹介をしております。今回は研究科長より本年度の抱負、2003年度学位取得者の一覧、2004年3月12日に本学にて行われた「第1回　体育・スポーツ科学関連三大学院合同研究発表会」、最後に本学大学院にて頻繁に使用される測定機器のひとつである筋力評価装置バイオデックスの紹介などを行います。これらの紹介を通じて大学院の様子を垣間見ていただければ幸いです。

1 研究科長より本年度の抱負

本大学院の博士後期課程(博士)は今春、4期生となる卒業生から体育科学博士を4人誕生させることができました。98年の開設から6年間で、博士を16人輩出したことになりますが、今後は、さらに制度としても完成度を高めることが後期課程の課題である、と考えています。

基本的に大学院は研究者の養成機関ですが、前期課程(修士)では、研究者以外のさまざまな道に進む者(企業、教職、自治体などに就職し実社会で貢献する者)も学んでいます。今後、高齢社会に対応してますます必要とされる運動・スポーツの指導者や健康科学の専門家など、専門職としてレベルの高い人材を養成するのも前期課程の一つの目標・役割になってくる、と考えています。

ところで、前期課程でも研究成果を国際学会で発表する者が出てきました。研究者を目指す者は今後ますます学会や雑誌に発表・投稿すると共に、早くから国際学会にも目を向けてほしいものです。

これからの2年間は、両課程の教育・研究をさらに充実させ、私自身の指導によるものだけでも論文博士も含め博士を8人誕生させたい、と思っています。

2 2003年度学位取得者一覧

本学大学院は博士前期課程と博士後期課程を配しており、本年度は35人が体育科学修士、および4人が体育科学博士の学位を取得されました。左に論文の題目と取得者の一覧を示します。

これら学位取得者の修了後の進路は、博士前期課程修了者は主に後期課程進学、中・高・大学教員、民間企業などであり、博士後期課程修了者は主に大学教員などでした。修了者は今後スポーツ・教育界などで幅広く活躍することが期待されています。

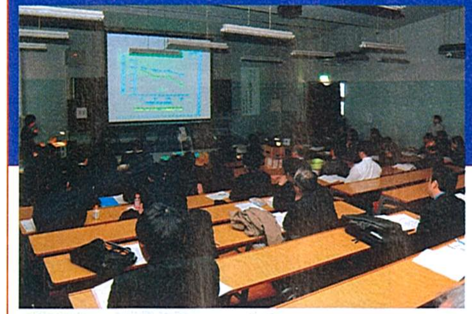
■平成15年度　体育科学研究科博士前期課程修了者一覧

氏　名	所属学系	論文題目
鴫原　幸治	スポーツ文化・社会科学系	技能連携校における保健体育授業に関する一考察
伊藤　嘉人	スポーツ文化・社会科学系	不登校生徒に対するホースセラピーの教育的効果について
大河　仁	スポーツ文化・社会科学系	自然体験活動における従事者の社会的スキルに関する研究
五十嵐拓馬	スポーツ文化・社会科学系	総合型地域スポーツクラブにおける受益者負担の展開とその可能性 ークラブ会員の帰属意識に注目してー
小泉　和史	スポーツ文化・社会科学系	水中スポーツの教育的効果に関する研究　ースクーバダイビングを中心にー
鈴木　義哉	スポーツ文化・社会科学系	新渡戸稲造における「武士道」の一考察 ーキリスト教身体観との比較を中心としてー
中田　滋樹	スポーツ文化・社会科学系	「日本アルピニズム」成立過程に関する研究
丹羽　裕之	スポーツ文化・社会科学系	知的障害者のスポーツ活動に関する研究
沼尻　雅博	スポーツ文化・社会科学系	スポーツウェアに関する研究 ー若者ファッションとしてのスポーツウェアを中心にー
朴　鍾鎭	スポーツ文化・社会科学系	大韓帝国における講道館柔道の移入過程に関する研究 ー1890年から1938年までー
馮　宏鵬	スポーツ文化・社会科学系	中国武術史の研究　ー隋末～明代の少林拳に関する史的考察ー
李　自力	スポーツ文化・社会科学系	日本武術太極拳連盟の成立過程に関する研究　ー日中太極拳交流を中心にー
加藤　範子	スポーツ文化・社会科学系	ピナ・バウシュの舞踊振付に関する一考察 ージョ・アン・エンディコットの見解を手がかりとしてー
富川　敬子	スポーツ文化・社会科学系	保健体育教育における子どもの認識の発達過程　ー感想文を手がかりにしてー
平塚　潤	トレーニング科学系	大学駅伝選手の一年間のトレーニングがパフォーマンスと呼吸循環機能に及ぼす影響　～箱根駅伝出場権獲得へのプロセス～
井嶋　寛興	トレーニング科学系	バドミントンのプッシュストロークにおけるフェイント動作の筋活動について
清田　英彦	トレーニング科学系	大学相撲選手における競技力と体幹筋力の関係
櫛部　静二	トレーニング科学系	陸上競技・長距離走における高地居住競技者と平地居住競技者との身体能力についての事例研究
朽木　康介	トレーニング科学系	下腿部筋損傷後の局所冷却が足底屈力と筋の動員様相に及ぼす影響
小林　靖長	トレーニング科学系	低酸素下におけるトレーニングが陸上競技400m系選手の作業能力に及ぼす影響　ー乳酸緩衝系からの検討ー
蔡　洙東	トレーニング科学系	The influence of cooling on muscle force and viscoelastic properties of human tendon structures in vivo
辻　昇一	トレーニング科学系	女子ハンドボール選手における自律訓練法を使用したパフォーマンス向上の試み
朴　海剛	トレーニング科学系	8週間のプライオメトリクス・トレーニングが大学サッカー選手の筋力発揮特性とパフォーマンスに及ぼす影響について
益川　満治	トレーニング科学系	女子バスケットボール選手の状況判断能力と試合でのプレーの関連 ～オフェンス場面について～
渡邉　陵由	トレーニング科学系	バスケットボールにおけるシュート中の筋活動と動作について ～ゲーム・シミュレーションを用いた検討～
荻野　真利	トレーニング科学系	二重標識水法を用いたエネルギー代謝測定
新垣　善之	健康科学・スポーツ医科学系	ピッチングにおける着足の踏み出し動作の特徴
越智　英輔	健康科学・スポーツ医科学系	エキセントリック収縮が関節の柔軟性と筋腱複合体の伸展性に及ぼす影響
喜多　一憲	健康科学・スポーツ医科学系	登り坂走における長距離選手のパフォーマンスに及ぼす生理学的要因
久米　雅	健康科学・スポーツ医科学系	大学女子スキー選手の寒冷血管反応
篠　岳瑠	健康科学・スポーツ医科学系	ライフセーバーの体力特性および溺者救助技能に関する研究
飛田　健	健康科学・スポーツ医科学系	学童保育児童の生活実態に関する研究 ～保護者からみた児童の外遊びと他の生活要因の関連について～
座間　佳世	健康科学・スポーツ医科学系	痴呆高齢者のレクリエーション活動が心身に及ぼす効果について
鈴木　綾子	健康科学・スポーツ医科学系	中学生の睡眠問題に関連する要因の検討 ー構造方程式モデリングを用いてー
中島　早苗	健康科学・スポーツ医科学系	運動負荷による酸化ストレス　―尿中8―OHdGによる検討―

■平成15年度大学院博士後期課程修了者一覧

氏　名	所属学系	論文題目
綿貫　慶徳	スポーツ文化・社会科学系	近代日本における新聞メディアのスポーツイベント戦略に関する史的考察 ー新聞販売ターゲットとしての新中間層に着目してー
奥村　真理	トレーニング科学系	常圧低酸素環境下の居住およびトレーニングの有効性
白土男女幸	健康科学・スポーツ医科学系	β-hydroxy-β-methylbutyrate(HMB)摂取が男子競技者に及ぼす効果
田中　幸夫	健康科学・スポーツ医科学系	スポーツの種目特性と末梢循環応答に関する研究

写真左から国士舘大学 大澤英雄学長
本学 長谷川正明学長 日本女子体育大学 加賀谷淳子学長



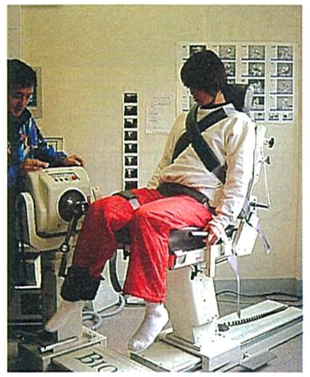
3 「第1回 体育・スポーツ科学関連三大学院合同研究発表会」を終えて

現在、体育・スポーツ科学関連分野の研究は多岐に渡っており、自然科学、人文科学、社会科学を基礎とした学際的色彩の濃い分野であるといえます。大学院における教育研究活動は、この分野の研究を発展させる原動力であり、大学院は科学の発展と次代を背負う研究者ならびに高度の専門的能力を持つ職業人を養成する責務を負っています。このような状況の中、私立大学大学院はそれぞれ特色ある研究科を設置して、教育研究活動を行ってきました。しかし、体育・スポーツ科学分野の成果をさらに発展させるには、従来のように各大学院が独立して教育研究を行うだけでなく、この先、連帯して活動することが望まれています。

そこで、各大学院の持つ知的資源を共有、あるいは一部を提供できる場を設置することを趣旨とし、日本女子体育大学、国士舘大学、および日本体育大学のそれぞれの大学院が連携して平成16年3月12日(金)に日本体育大学において「第1回　体育・スポーツ科学関連三大学院合同研究発表会」が開催されました。シンポジウムでは「ボールゲーム種目の競技力向上を中心に」と題して6名の大学院生に発表して頂きました。また、口頭発表では15題の研究発表が、さらにポスター発表では約70題の研究発表がなされ、活発な質疑応答が行われました。研究発表会終了後に催された懇親会においても、研究内容についての意見交換が盛んに行われ、大学院間の交流の場として十分な成果を収めることができました。今後も、この合同研究発表会が院生の視野を広げるとともに、担当教員間のコミュニケーションの場として機能させるとともに、日本の体育・スポーツ科学の研究の推進を図るべく努力していきます。

4 シリーズ 研究施設からみた大学院における研究活動 その② Biodexシステム3

大学院では日々体育・スポーツに関わる研究活動が展開されています。このシリーズでは本学大学院での研究活動にて頻繁に使用される機器・設備を通して本学にて展開される研究活動をご紹介していきたいと思います。第二回目は筋力評価装置　バイオデックスシステム3(写真左)です。



前回は筋肉というエンジンの大きさ(筋の断面積)を測るMRIについて紹介しました。今回紹介するバイオデックスは、筋肉というエンジンの能力(＝筋力)を測る装置です。学校体育などの現場で筋力測定といえば、握力や背筋力を思い浮かべると思いますが、握力や背筋力は物を引っ張る力を測定し筋力として評価しています。これに対し、バイオデックスでは肘や膝といった様々な関節を回転させる力(トルク：単位はNm)を測ることができます。筋肉は一つ以上の関節をまたいで骨に付着しているので、筋肉が力を発揮するとまたいだ関節を中心に骨を回転させます。この回転の力を測定することによって、回転を引き起こしている筋肉の力を知ることができるのです。

この筋力評価装置において握力や背筋力などの測定方法と大きく異なる点があります。握力や背筋力の測定では〝静的〟な筋力が測られるのに対して、バイオデックスでは〝動的〟な筋力を測ることができます。静的筋力とは関節を動かさない状態で測られる筋力のことで、逆に動的筋力とは動きの中で発揮される筋力のことです。実際のスポーツ場面では動きながら筋力を発揮する場合がほとんどですので、動的な筋力を測ることは非常に重要です。

膝や肘の曲げ伸ばしの筋力、足関節の筋力を始め、体幹の捻りや曲げ伸ばしの筋力測定などが多く行われている測定です。このほかにも様々な利用方法があり、大学院での研究活動の中心的機器となっています。今後もバイオデックスを最大限有効に利用し研究論文の作成に取り組むとともに、競技力向上につながる研究を展開していきたいと考えています。

おわりに

今回の記事の中でも特に「三大学院合同研究発表会」は、本学大学院が幹事となり本年度より実施された取り組みです。今後も本大学院での取り組みや研究成果を多くの外部研究者と切磋琢磨しあうとともに、本学が体育・スポーツ科学分野発展の牽引力となることが出来ればと日々奮闘しております。

(文責：大学院研究科長室)

『日体フェスティバル'03』

日体フェスティバル実行委員会

11月1日(土)より3日(月・祝)まで、横浜・健志台キャンパスにおいて『日体フェスティバル'03』を開催しました。

本年度は、大坪敏郎実施委員長、星雄樹実行委員長のもと、『Smile～みんなに笑顔を～』をテーマに掲げました。

日体フェスティバル'03オープニングには、世界水泳バルセロナ2003で世界新記録を樹立した北島康介選手(体育学科3年)が出席。その感動の報告とアテネ五輪へむけての抱負を語ってくれました。

トークショーでは本学OBであり、バルセロナ五輪柔道で金メダリストの古賀稔彦さんに『夢の実現』をテーマに感動的なトークをしていただき、また昨年に引き続き、学生たちのエネルギーを結集した演技発表会を開催。『スマイリング日体～音と動きのハーモニー～』をテーマに素晴らしい演技を披露してくれました。

最終日はテーマ『Smile』にちなんで、吉本お笑いライブを開催。木村祐一・雨上がり決死隊他6組の皆さんのトークに体育館は笑いの渦となりました。

そのほかにも、毎年恒例になっている野外ステージでのさまざまな企画、オールスター日体、模擬店、フリーマーケットなど、各クラブの特色を生かした公開試合や公開練習、スポーツ教室にも多くの方々に参加していただき、日体フェスティバル'03を開催するにあたり近隣住民の皆様をはじめ、多くの関係者にご助力いただきましたことに深く感謝いたします。

＝日体フェスティバル'03入場者数＝

11月1日(土)	1, 200名
11月2日(日)	2, 500名
11月3日(月・祝)	2, 800名
合計	6, 500名

「体育研究発表実演会」報告

実演会実施委員会

2年に1度の「体育研究発表実演会」は、『燦(きらめき)－その瞬間(とき)－』をテーマに、第46回として東京大会をスタートに、今回は北海道大会を旭川・札幌・函館会場で実施いたしました。

延べ入場者数14,000名という多数のご来場をいただき、ありがとうございました。

同窓会・保護者会の皆様をはじめ、多くの関係者にご協力いただきましたことに深く感謝いたします。

なお、次回の開催は2005年を予定しております。

◆東京大会
- 平成15年10月25日(土)　国立代々木競技場・第一体育館
  入場者数6,800名

◆北海道大会
- 平成15年11月20日(木)　旭川会場／「旭川市総合体育館」
  入場者数2,300名
- 平成15年11月22日(土)　札幌会場／「北海道立総合体育センター・きたえーる」
  入場者数3,700名
- 平成15年11月23日(日)　函館会場／「函館市民体育館」
  入場者数1,200名

学内合同企業説明会に 学生300名参加！

就職課

1月17日(土)9時から午前・午後の部に分かれて、41社の人事採用担当者によるブースごとの会社説明会が行われました。人気業種には30分待ちの行列ができるなど、第2体育館は熱気に溢れました。

参加学生は、初めての企業説明会ということもあり、少し緊張気味ではありましたが、積極的に各社ブースを回っていました。

終了後の学生からのアンケートによると、学内でこのような経験ができることは大変良い機会であり勉強になったとの満足の声や、できれば一度ではなく何回か開催してほしいなどの要望もありました。

平成15年度「大学・短大卒業式」「専攻科修了式」「大学院修了式」

平成16年3月10日、東京・世田谷キャンパス深沢校舎第一体育館にて平成15年度「大学・短大卒業式」が行われ、大学体育学部1,297名、短大188名に卒業証書が授与されました。午後からは、741教室にて「専攻科修了式」が、引き続き「大学院修了式」が行われ、専攻科16名に修了証書が、大学院39名（前期課程35名、後期課程4名）に学位記が授与されました。

平成15年度退職教員

◆塔尾武夫（とうの たけお）教授

1934年（昭和9年）3月27日生まれ　大分県出身
県立宇佐高校から1954年本学入学　58年卒業後、同大学助手として勤務、専任講師、助教授を経て、1976年教授
1998年4月から2001年3月まで学長就任　2004.3退職

◆池田敬子（いけだ けいこ）教授

1933年（昭和8年）11月11日生まれ　広島県出身
県立三原高校から1952年本学入学　56年卒業後、同大学助手として勤務、専任講師、助教授を経て、1978年教授
2003年4月副学長就任　2004.3退職
〔2002年度国際体操殿堂入り、2003年三原市名誉市民に選ばれる〕

◆大林昇（おおばやし のぼる）教授

1933年（昭和8年）7月29日生まれ　広島県出身
県立竹原高校から1952年広島大学入学　56年卒業後、1956年広島大学大学院修士課程入学、58年修了。大学院修了後、防衛庁に勤務の後、九州産業大学教授を経て、1994年本学に教授として勤務。1989年から、日本大学大学院理工学研究科博士課程に社会人入学、1995年に博士（理学）の学位を取得。2004.3退職

◆大和眞（やまと まこと）教授

1933年（昭和8年）9月7日生まれ　島根県出身
県立浜田高校から1952年本学入学　57年卒業後、自由ヶ丘学園高等学校教諭、関東労災病院勤務、東京慈恵会医科大学助手を経て、1969年本学に助教授として勤務、1976年教授、1998年4月から2000年4月30日まで副学長就任
2004.3退職

◆松田治廣（まつだ はるひろ）教授

1938年（昭和13年）11月15日生まれ　愛媛県出身
県立宇和島東高校から1957年本学入学　61年卒業後、同大学助手として勤務、専任講師、助教授を経て、1979年教授
2004.3退職
〔1999年紫綬褒章受賞、2000年宇和島市名誉市民に選ばれる、2000年度国際体操殿堂入り〕

平成16年度入試データ　(2004.3.24現在)

■大学／体育学部

※（　）内は女子内数　*倍率＝受験者数÷合格者数

区分		志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	倍率
体育学科	推薦	506 (130)	506 (130)	413 (110)	410 (110)	1.2
	一般	2,196 (464)	2,162 (456)	543 (79)	381 (42)	4.0
	学科計	2,702 (594)	2,668 (586)	956 (189)	791 (152)	2.8
健康学科	推薦	33 (23)	33 (23)	29 (20)	29 (20)	1.1
	一般	654 (221)	644 (218)	242 (78)	146 (54)	2.7
	学科計	687 (244)	677 (241)	271 (98)	175 (74)	2.5
武道学科	推薦	49 (14)	49 (14)	46 (14)	46 (14)	1.1
	一般	123 (27)	121 (26)	91 (22)	84 (21)	1.3
	学科計	172 (41)	170 (40)	137 (36)	130 (35)	1.2
社会体育学科	推薦	41 (17)	41 (17)	36 (16)	36 (16)	1.1
	一般	805 (132)	794 (131)	270 (39)	139 (30)	2.9
	学科計	846 (149)	835 (148)	306 (55)	175 (46)	2.7
合計	推薦	629 (184)	629 (184)	524 (160)	521 (160)	1.2
	一般	3,778 (844)	3,721 (831)	1,146 (218)	750 (147)	3.2
	総合計	4,407(1028)	4,350(1015)	1,670 (378)	1,271 (307)	2.6

※推薦入試には帰国子女特別選抜を含む（体育学科:2名）

■短大／体育科・保育科

区分		志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	倍率
体育科	推薦	161	161	90	83	1.8
	一般	317	313	80	46	3.9
	科計	478	474	170	129	2.8
保育科	推薦	40	40	37	36	1.1
	一般	59	58	43	28	1.3
	科計	99	98	80	64	1.2
合計	推薦	201	201	127	119	1.6
	一般	376	371	123	74	3.0
	総合計	577	572	250	193	2.3

■専攻科

志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	倍率
12 (3)	12 (3)	12 (3)	12 (3)	1.0

■編入学

志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	倍率
89 (84)	89 (84)	89 (84)	85 (82)	1.0

■大学院体育科学研究科

区分		博士前期課程					博士後期課程				
		志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	倍率	志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	倍率
スポーツ文化・社会科学系	本学	3 (1)	3 (1)	2 (1)	2 (1)		3 (0)	3 (0)	3 (0)	3 (0)	
	他大	6 (0)	6 (0)	6 (0)	5 (0)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	合計	9 (1)	9 (1)	8 (1)	7 (1)	1.1	3 (0)	3 (0)	3 (0)	3 (0)	1.0
トレーニング科学系	本学	12 (1)	12 (1)	10 (1)	10 (1)		4 (0)	4 (0)	4 (0)	3 (0)	
	他大	4 (2)	4 (2)	4 (2)	3 (1)		1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	
	合計	16 (3)	16 (3)	14 (3)	13 (2)	1,1	5 (0)	5 (0)	5 (0)	4 (0)	1,0
健康科学・スポーツ医科学系	本学	10 (4)	10 (4)	7 (3)	7 (3)		2 (1)	2 (1)	2 (1)	2 (1)	
	他大	1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	合計	11 (4)	11 (4)	8 (3)	8 (3)	1.4	2 (1)	2 (1)	2 (1)	2 (1)	1.0
合計	本学	25 (6)	25 (6)	19 (5)	19 (5)		9 (1)	9 (1)	9 (1)	8 (1)	
	他大	11 (2)	11 (2)	11 (2)	9 (1)		1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	
	合計	36 (8)	36 (8)	30 (7)	28 (6)	1.2	10 (1)	10 (1)	10 (1)	9 (1)	1.0

キャンパス内全面禁煙について

本学は、体育・スポーツの専門教育・研究機関として、また体育教員の養成大学として、110年に及ぶ長い歴史を重ね、社会的信頼を育んできました。

このような歴史的背景を持ち、スポーツにおける競技力の向上や体育を介した健康の維持増進への貢献を追究する本学では、以前から学内において体育大学として喫煙の是非の議論がなされ、いち早くキャンパス内の分煙化を実施しました。これを後押しするように「健康増進法」が制定され、受動喫煙防止への対応が義務付けられたことを受け、平成16年1月13日の教授会において、受動喫煙を防止することのみの方策ではなく、根本的な視点から「キャンパス内全面禁煙」を審議・決定いたしました。決定事項は、下記に示すとおりです。

キャンパス内全面禁煙について

平成16 年1 月13 日
教授会決定

【趣 旨】

喫煙が、スポーツマンはもとより人間の健康に及ぼす悪影響については、すでに周知の事実である。平成14年8月に「健康増進法」が制定され、15年5月から施行された。これに伴い、学校等の機関においては、当該施設における受動喫煙防止への対応が義務づけられた。

本学が目指すところは、スポーツにおける競技力の向上や体育を介した健康の維持増進への貢献を追究することであるので、喫煙に対する対応についても、他の模範となることが求められると考える。したがってこのような認識に立って、以下の措置を講じるものである。

【実施内容】

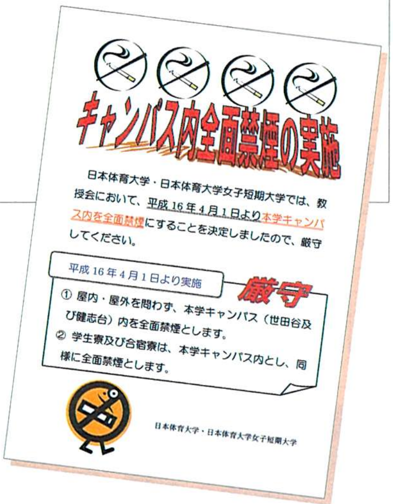
1. 屋内、屋外を問わず、本学キャンパス(世田谷及び健志台)内を全面禁煙とする。
2. 学生寮及び合宿寮は、本学キャンパス内とみなして、同様に全面禁煙とする。各運動部等の合宿所等に関しては、基本的には各部の判断に委ねるものとするが、この決定の趣旨に鑑み、同様の措置を講じることを望むものである。

【留意事項】

1. キャンパス内の全面禁煙に伴い、キャンパス周辺で喫煙する者(本学関係者)の増加が予想され、周辺環境への影響が懸念されるため、学生・教職員の一人一人が、社会人としての自覚を持ち、吸殻の始末などについて社会のルールを遵守することを喚起・実践する。また、定期的にキャンパス周辺のゴミ拾いを行うことにより、周辺環境を良好に維持することに努め、近隣住民との良好な関係の維持に配慮する。
2. 学内外の者の協力を得るため、掲示等により周知に努める。

【実施の時期】

平成16年4月1日



全面禁煙を完遂する難しさのなか、都内の大学では最初に完全な「無煙キャンパス」を宣言したわけです。宣言を実行するには、学生・教職員及び来学者みなさまのご理解とご協力がなくては実現できません。宜しくお願いいたします。

《資料》

■健康増進法

［第五章第二節　受動喫煙の防止］

第25条　学校、体育館、病院、劇場、観覧場、集会場、展示場、百貨店、事務所、官公庁施設、飲食店その他の多数の者が利用する施設を管理する者は、これらを利用する者について、受動喫煙(室内又はこれに準ずる環境において、他人のたばこの煙を吸わされることをいう。)を防止するために必要な措置を講ずるように努めなければならない。

■敷地内全面禁煙(無煙キャンパス)の大学（2004.3月調べ）

函館短期大学、旭川医科大学(北海道)／秋田大学医学部(秋田県)／聖徳大学(千葉県)／金沢大学医学部(石川県)／びわこ成蹊スポーツ大学(滋賀県)／名古屋女子大学・名古屋女子大学短期大学部、大垣女子短大、岡崎女子短大、愛知みずほ大学(愛知県)／大阪府立看護大学(大阪府)／和歌山大学(和歌山県)

03年度［下半期 クラブの主な大会成績］

10月～3月

クラブ名	大会名	結果	氏名
■ウエイトリフティング	女子　全日本学生新人選手権	48キロ級　優勝	久保田佳乃
	女子　世界選手権	75キロ超級Cクラス　スナッチ105キロ、ジャークとのトータル227．5キロ（日本新記録）	今鉾一恵
	女子　世界選手権	75キロ超級　15位	今鉾一恵
	女子　国体記念杯女子競技会	一般69キロ級　優勝	下玉利瞳
■カヌー	男子　日本レーシング選手権	カヤックシングル1000m　1位	松田淳司
■基礎スキー	女子　全国学生岩岳大会	基礎の部女子団体戦　1位　　基礎の部女子総合　1位	
■ゴルフ	男子　文部科学大臣杯争奪日本学生王座決定戦	3位	甲斐慎太郎
	女子　全日本サンスポ女子アマゴルフ選手権	4位	下川めぐみ
	女子　信夫杯争奪日本大学対抗戦	4位	
■サッカー	女子　関東学生	2位	
	女子　全日本大学女子	優勝（4年連続10度目の優勝）	
■柔道	男子　全日本学生体重別選手権	66キロ級　優勝	小山田和行
	女子　講道館杯全日本体重別選手権	57キロ級　3位	吉成麗子
■水泳（競泳）	男子　東京SC招待記録会	100m平泳ぎ　1位	北島康介
		200m平泳ぎ　1位	北島康介
		50m平泳ぎ　1位	北島康介
	男子　短水路W杯ストックホルム大会	50m平泳ぎ　5位	北島康介
		100m平泳ぎ　2位	北島康介
		100m個人メドレー　1位（53秒71　日本新）	北島康介
		200m個人メドレー　1位（1分56秒68　日本新）	北島康介
	男子　短水路W杯ベルリン大会	50m平泳ぎ　4位（27秒27　日本新）	北島康介
		100m平泳ぎ　2位（58秒24　日本新）	北島康介
		200m平泳ぎ　2位	北島康介
	女子　短水路W杯ストックホルム大会	50m背泳ぎ　5位	中村礼子
		100m背泳ぎ　2位	中村礼子
		200m背泳ぎ　1位	中村礼子
	女子　短水路W杯ベルリン大会	50m背泳ぎ　5位	中村礼子
		100m背泳ぎ　3位	中村礼子
		200m背泳ぎ　1位	中村礼子
	男子　短水路東京都記録会	100m平泳ぎ　1位（58秒23　日本新）	北島康介
		200m平泳ぎ　1位	北島康介
	女子　短水路東京都記録会	200m背泳ぎ　1位	中村礼子
■水泳（水球）	男子　日本学生選手権	優勝（6年連続27度目の優勝）	
	女子　日本学生選手権	準優勝	
■スキー（アルペン）	男子　W杯　第1戦	13位	佐々木明
	男子　全日本学生選手権	大回転　3位	高橋正志
	男子　W杯 第10戦	4位	佐々木明
	男子　W杯 最終戦	5位	佐々木明
■スキー（クロスカントリー）	女子　全日本学生チャンピオンスキー大会	5キロ（クラシカル）　1位	富澤幸絵
	女子　全日本学生選手権	スプリント1.2キロ（フリー）　1位	富澤幸絵
■スキー（ジャンプ）	男子　全日本選手権	ラージヒル　1位（25年ぶり大学生王者）	遠藤悠介
■スキー（スノーボード）	男子　W杯　セルデン大会	パラレル大回転　57位	川口晃平
		パラレル回転　56位	川口晃平
	男子　W杯　バートガシュテン大会	パラレル回転　60位	川口晃平
	男子　W杯　アルプデュエス大会	パラレル大回転　48位	川口晃平
	男子　W杯　マリボル大会	パラレル大回転 47位	川口晃平
	男子　W杯　札幌真駒内大会	パラレル大回転 43位	川口晃平
		パラレル回転最終順位　42位	川口晃平
	男子　全日本選手権	1位	川口晃平
■スキー（モーグル）	男子　W杯第1戦	22位	下山研朗
	男子　W杯第2戦	31位	下山研朗
	男子　W杯　ディアバレー大会	26位	下山研朗
	男子　W杯　第9戦	18位	下山研朗
	男子　W杯　第10戦	26位	下山研朗
	男子　W杯　第11戦	33位	下山研朗
	男子　W杯　アイロロ大会	20位	下山研朗
■スケート	男子　スピードスケート真駒内選抜競技会	1万m　2位	安田直樹
		5千m　2位	安田直樹
		5千m　3位	畠山薫
	男子　全日本選手権	500m　1位	中嶋敬春
		1500m　1位	中嶋敬春
	男子　全日本スプリント選手権	総合　3位	中嶋敬春
	男子　世界スプリント選手権	500m　20位	中嶋敬春
		1000m　7位　総合得点　13位	中嶋敬春
	男子　W杯短距離ハルビン大会	1000m（Bクラス）　3位	中嶋敬春
	男子　W杯　インツェル大会	1000m　1位（日本選手1000mV、6シーズンぶり）	中嶋敬春
	男子　W杯　ヘーレンフェイン大会	1000m総合得点　11位	中嶋敬春
	男子　世界距離別選手権	1500m　19位	中嶋敬春
		1000m　7位	中嶋敬春
■相撲	男子　学生個人体重別相撲	85キロ未満級　準優勝	長沢孝治
	男子　全日本学生相撲選手権	3位	
■ソフトテニス	男子　関東大学	優勝（4季ぶり21度目の優勝）	
	女子　世界選手権	女子ダブルス　3位	浜中洋美
	男子　全日本学生選抜インドア選手権	男子ダブルス優勝	篠原秀典、宮本亨
	女子　全日本インドア選手権	優勝	逢野祐子、浜中洋美
■体操競技	男子　全日本選手権	団体総合　3位	
		個人総合　5位	中瀬卓也
		個人種目別　ゆか　2位	中瀬卓也
		個人種目別　つり輪　3位	長田克彬
■トランポリン	男子　全日本選手権	シンクロ　優勝	外村哲也
		団体　優勝	
	女子　全日本選手権	団体　準優勝	
■バスケットボール	男子　関東大学リーグ	2位	
	女子　関東女子学生リーグ	2位	
	女子　全日本学生選手権	優勝（3年連続18度目の優勝）	
■バドミントン	男子　全日本学生選手権	団体優勝（2年連続11度目の優勝）	
		シングルス　優勝	茂見祥平
	女子　全日本学生選手権	シングルス　準優勝	松尾美穂子
■ハンドボール	男子　関東学生	優勝（5季ぶり36度目の優勝）	
	男子　全日本学生選手権大会	優勝(2年連続16度目の優勝)	
■フェンシング	男子　関東学生選手権	サーブル団体　3位	
	女子　関東学生選手権	エペ団体　準優勝	
	女子　全日本学生選手権	フルーレ団体　優勝（6年ぶり5度目の優勝）	
		サーブル団体　準優勝	
		サーブル個人　優勝	二田紀子
■ラクロス	男子　関東学生リーグ	準優勝	
■陸上競技	男子　横浜市陸上競技選手権大会	100m障害　優勝	渡部信人
		棒高跳び　優勝	八木祐介
		ハンマー投げ　優勝	西田正和
	女子　横浜市陸上競技選手権大会	200m　優勝	長山香織
		400m障害　優勝	佐藤恭子
■陸上競技（駅伝）	男子　出雲全日本大学選抜駅伝競走	9位　　3区1位	保科光作
	女子　関東大学女子駅伝対校選手権	2位	
	男子　全日本大学駅伝対校選手権大会	5位　　7区1位	上野飛偉楼
	男子　東京箱根間往復大学駅伝	往路4位　　1区1位	鷲見知彦
		復路10位　総合9位	
	男子　犬山ハーフマラソン	1位　（大会新）	鷲見知彦
	女子　犬山ハーフマラソン	2位	稲田雪恵
	男子　京都シティーハーフマラソン	2位	熊本剛
		3位	四辻聖
	男子　仙台ハーフマラソン	1位	保科光作
■レスリング	男子　全日本大学グレコローマン選手権	準優勝	
	男子　全日本大学選手権	優勝	
		フリー55キロ級　優勝	清水聖志人
		フリー60キロ級　優勝	小島豪臣
		フリー66キロ級　優勝	池松和彦（助手）
		フリー96キロ級　準優勝	森山政秀
	男子　ヤシャドグ記念国際大会	66キロ級　3位	池松和彦（助手）

dot.NITTAIDAI

[NITTAIDAI(ニッタイダイ)] 発行日●2004年4月1日 発行●日本体育大学/日本体育大学女子短期大学 広報委員会 TEL 03-5706-0921 FAX 03-5706-0949 http://www.nittai.ac.jp/ 制作協力●(株)図書出版

■学年暦（平成16<2004>年度上半期）

月	日(曜日)	行事
4	3(土)	入学式　（横浜・健志台キャンパス）
	5(月)～10(土)	新入生オリエンテーション （健康診断、スポーツテスト、学生証手続、履修申告、他） 在学生　健康診断、履修申告確認等
	10(土)	防災訓練及び就職対策等の行事　生活指導等
	12(月)	前学期授業開始
	12(月)～	大学　養護実習（健康学科養護コース4年）[5/15(土)まで]
	12(月)～16(金)	履修申告確認期間
	17(土)	介護等体験事前指導講習会　（短大体育科1年・その他）
	30(金)	自宅研修日
5～6	5/31(月)～26(土)	教育実習（大学4年）、教育実習（短大体育科2年） 教育実習2（短大保育科2年）
7	3(土)～6(火)	大学　水泳指導実習：日赤水上安全法コース（体育学科3年）
	3(土)～16(金)	大学　海浜実習（1年）
	4(日)～7(水)	短大　キャンプ実習（保育科2年）
	8(木)～18(日)	大学　キャンプ指導実習（体育・健康・武道学科3年）
	4(日)～10(土)	大学　ゴルフ指導実習（体育学科2年）　第1・2団（雫石）
	13(火)～16(金)	大学　ゴルフ理論・実習（社会体育学科4年）
	9(金)～15(木)	大学　マリンスポーツ理論・実習（社会体育学科3年）
	5(月)～12(月)	短大　体験学習（1年）
	20(火)～23(金)	前学期定期試験期間
	23(金)	前学期授業終了（試験を含む）
	24(土)～30(金)	補講・追試験・再試験期間
8	2(月)～	大学　看護臨床実習（健康学科養護コース3年）　[9/3(金)まで]
	9(月)～	夏季休業［10/3(日)まで］
	9(月)～	大学　社会教育実習（社会体育学科3年）[9/18(土)まで]
9	8/29(日)～8(水)	大学　キャンプ理論・実習（社会体育学科2年）
	20(月)	開学記念日
	23(木)～10/2(土)	大学　水泳指導実習：ダイビングコース（体育学科3年）
	28(火)～10/1(金)	大学　ゴルフ指導実習（体育学科2年）　第3団（菅平）

■日本学生支援機構（旧 日本育英会）奨学生の募集について

日本学生支援機構奨学金制度は、経済的に安定した学生生活を送るために設けられています。奨学金を受けるためには、学力、人物ともに優れ、経済的に修学が困難であると認められることが条件になります。
応募の機会は基本的に年に一度です。募集説明会の日時等は学生課、教学局の掲示板で通知しますので、希望者は必ず確認をし、応募の機会を逃さないようにしてください。

なお、家計を支えている人の失職、死亡、不慮の事故、災害などによって家計が急変した場合は「緊急採用」「応急採用」の制度がありますので、事情が生じたときには早急に東京・世田谷キャンパス学生課、横浜・健志台キャンパス教学局に相談をしてください。

各地方公共団体の奨学金については、大学に募集があった場合は掲示にて通知しますが、原則的に各地域の教育委員会等に各自で問い合わせをしてください。

■問い合わせ先　東京・世田谷キャンパス　学生課 03-5706-0904
横浜・健志台キャンパス　教学局 045-963-7900

〔表紙の学生紹介〕
鷲見知彦（すみ・ともひこ）1985.1.23生
体育学科2年　愛知県・豊川工業高校出身
陸上競技部所属　2004箱根駅伝1区区間賞

■新採用教員紹介

渡邉　功（ワタナベイサオ）
[大学：教授] 体育学科
運動方法（テニス）
早稲田大学商学部卒業

落合卓四郎（オチアイタクシロウ）
[大学：教授] 教養・教職科
自然科学
米国インディアナ州ノートルダム大学
大学院博士課程修了　Ph.D（理学博士）

根本　研（ネモトケン）
[大学：助手] 体育学科
運動方法（バレーボール）
日本体育大学大学院体育科学研究科
博士後期課程単位取得満期退学
体育科学修士

綿貫慶徳（ワタヌキヨシノリ）
[大学：助手] 武道学科
大学院スポーツ文化・社会科学系
日本体育大学大学院体育科学研究科
博士後期課程修了
体育科学博士

［編集後記］平成16年度からの新役職者が決定し、巻頭特集にインタビュー記事を掲載しました。この形での特集は03号で編集スタッフは経験しており、取材・編集要領は理解してはいるものの、具体的に取材を開始できるのは、3月5日の教授会終了後となることは必然であり、4月3日・入学式に間に合うのか・・・、正直なところ不安は隠せませんでした。しかし、その不安も新役職者となられた先生方の素早い取材・校正協力により、心快晴となりました。本当にありがとうございました。
ところで、この時季一段と暖かく、最終校正を行っているこの時、早くも桜がちらほらと咲き始めています。配布する入学式に桜の花はあるのでしょうか？しかし、新たに日体大生となられたみなさんの心の中には今きれいな桜がきっと満開のことでしょう。この日体大でたくさんの養分を吸い上げ、未来への更に大きなつぼみを付けてください。